

かしわらっ子はぐくみプラン

(柏原市学力向上計画)

【令和 7 年度版】

柏原市教育委員会

【目標】

すべての子どもたちに確かな学力を！！
～教育委員会・学校・家庭が連携した取組みの推進～

【背景及び現状・課題】

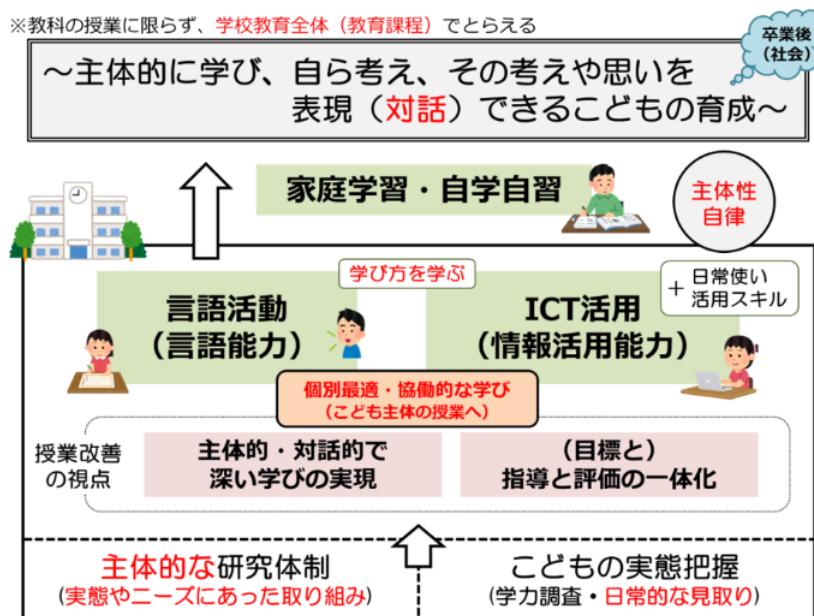
- 現行の学習指導要領においては、育成すべき資質・能力が「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」の3つの柱で整理され、これら3つの力をバランスよく育むことが求められています。
- 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」（令和6年12月25日中央教育審議会）では、顕在化している課題として以下の3点が指摘されており、次期学習指導要領の改訂に向けて議論が行われています。
 - ・ 主体的に学びに向かうことができていない子どもの存在
 - ・ 学習指導要領の理念や趣旨の浸透は道半ば
(補足) 知識と事象の関連づけ、概念としての知識習得や深い意味理解、自分の考えを持ち明確に説明、自律的に学ぶ自身、社会参画の意識 等
 - ・ デジタル学習基盤の効果的な活用
- 柏原市では、平成28年度より「かしわらっ子はぐくみプランー柏原市学力向上計画ー」を作成し、市内のすべての子どもたちに確かな学力を育むため、教育委員会・学校・家庭が連携した取組みを推進しています。
- 令和4年度から6年度の各種調査結果より、基本的な生活習慣が継続的に身についていること、挑戦心や達成感、自己有用感等において概ね肯定的であること、学級で互いを認め合い、協働的に活動できることといった成果が見られます。また、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善も着実に進んでおり、課題解決にむけた探究的な学習や、考えを深めたり、次の学びにつなげたりする学習が展開され、学習指導要領の趣旨の実現をめざした授業づくりが進んでいます。
- 一方で、各種調査結果からは、共通して以下のような課題もみられます。
《教科調査より》
 - ・ 目的や意図に応じて（条件に合うように）考えを記述する。
 - ・ 複数の情報（文章・グラフ・表など）を読み取る。
 - ・ 内容を整理、分析し、区別したり構造化（再構築）したりする。
 - ・ 考えが伝わるように、根拠を持って工夫して言語化（表現）する。

《質問調査より》

- 授業外で ICT 機器を学習のために使うことが少なく、ゲーム、SNS や動画視聴に使う時間が長い。
 - 学校の授業外で勉強をする時間が少ない。
 - ICT 機器の活用に効力感を感じているものの、授業で活用する機会が少ない。
- 上述した背景や課題をふまえ、柏原市の学力向上の方向性を「主体的に学び、自ら考え、その考え方や思いを表現（対話）できる子どもの育成」と位置付けています。これは、卒業後の社会においても、豊かな可能性を開花させ、自らの人生を舵取りして幸せな生活を送るとともに、持続可能な幸せな社会の作り手となることへの願いも込めています。

【学力向上の方向性】

主体的に学び、自ら考え、その考え方や思いを表現（対話）できる子どもの育成



【重点的な取組み】

- 「思考力・判断力・表現力」の育成をめざした授業づくり
- ICT を活用した授業づくり
- 学習評価の充実
- 研究体制の充実
- 家庭学習の充実
- 学力向上の指標と目標値

【学力向上を趣旨とした組織体制】

本市の子どもたちの確かな学力の定着や学びへの意欲の向上をめざし、学力向上に繋がる具体的な取組みを調査・研究・計画するため、平成21年度から、教育委員会、校長会、教員で構成する「学力向上推進委員会」を組織し、平成26年度からは更に有識者や小中学校の代表校長等からなる「学力向上対策委員会」を設置し運用してきました。今後も全国学力・学習状況調査や中学生チャレンジテスト、小学生すくすくウォッチ、かしわらっ子はぐくみテスト等の分析を行い、課題を明確にしながら、その課題を解決するための計画を立て効果的且つ迅速に対応できる組織運営をめざします。

(今後の進め方について)

- 学力向上対策委員会のメンバー構成は、広く学力向上について意見を聴取するという観点から、学力向上について識見を有する者、小中学校の代表校長、教育委員会事務局の代表者で構成します。
- 学力向上推進委員会のメンバー構成は、本市の子どもたちの学力向上をめざす観点から、各学校の学力向上担当教員、小中学校の代表校長、指導主事等で組織します。
- 各委員会で検討した内容等については、教育委員会、校長会、教頭会、教職員との情報共有を図り、円滑な実践へと繋げます。
- 各年度における全国学力・学習状況調査、中学生チャレンジテスト、小学生すくすくウォッチ、かしわらっ子はぐくみテストの結果等を分析し、成果や課題について検証するとともに、授業改善に向けた取組に反映させます。
- 学力向上は、早急な取組が必要であることから、検討した内容等について教育委員会での内部調整や各学校での取組体制の整備を図り事業を展開します。

【取組みを支える市の施策】

(1) 教員研修

大学教授や指導主事等、教科指導等に熟練した経験豊かな人材を講師に迎え、教員が「思考力・判断力・表現力」の育成をめざした授業づくり、ICTの活用、学校の研究体制の推進等を学ぶ研修を実施します。また、初任者教員をはじめ、2年目教員や5年目教員、10年目教員、講師等、キャリアステージに応じた幅広い研修を開催し、子どもの学びを育てる授業力向上を図ります。

(2) かしわらっ子はぐくみテスト

児童・生徒の学力と学習状況を継続的に把握するために、小学校の児童を対象に、「かしわらっ子はぐくみテスト」を実施します。その結果から各校が実施してきた取組を検証することにより、教育活動の効果的な工夫改善を図ります。

（3）幼小中一貫教育推進教員、学力向上重点加配教員の配置

各中学校区に市費による幼小中一貫教育推進教員や学力向上重点加配教員を配置し、一貫教育の推進や中学校区のニーズに応じた教育活動のさらなる充実を図ります。

（4）ICT 支援員の配置

「GIGA スクール構想の実現」により整備した ICT を有効に活用するために、市内小中学校に、専門的知識を有する ICT 支援員を配置します。主に授業における機器・ソフトウェア操作支援や不具合への対応を中心に教材作成の補助やホームページの更新、教職員への研修等の業務を行い、各校の ICT 活用推進を図ります。

（5）学校司書の配置

市内小・中学校に学校司書を配置します。学校司書が学校図書館の運営の中心となり、蔵書整備や蔵書の選定および図書に関わる掲示等の環境整備をし、学校図書館の「学習・情報センター」的機能を充実させます。環境整備の支援として、すべての子どもが自分の好きな本を手軽に楽しみ、多くの本を借りることができるよう、蔵書管理ソフトを学校図書館に導入します。また、ブックトークや「図書室だより」の発行、家庭においての読書日記「うちどくノート」の実施などにより、子どもたちの読書意欲を向上させるとともに、家庭・地域との連携もすすめます。

（6）学校教育支援指導員の派遣

幼児教育・学校教育における学習支援の重要性に鑑み、地域の教育力や外部の支援を活かし、学習機会の提供を積極的に行うために、専門的な技術指導力を備えた適切な地域の人材を学校教育支援指導員として、学校園に派遣します。また、学校活性化に貢献でき、教育に強い熱意をもつ大学生から児童・生徒への支援と協力を得ます。この事業を通じて、学校園と地域ならびに大学等との連携の促進及び開かれた学校園づくりの発展に努めます。

（7）小学校・中学校英語指導事業（ALTの配置）

ALT（外国語指導助手）を全校に配置し、学んだ英語を実際に活用することをとおしてコミュニケーション能力を育成します。また、外国の文化・生活に触れ、互いの文化や考え方を知ることで双方の「違い」を理解し、尊重する態度を養います。

（8）スタディ・アフター・スクール

学力向上を図るには、授業改善とともに、家庭学習習慣の定着が求められます。そのため、小学校において、平日の放課後に、大阪教育大学、関西福祉科学大学等の学生や地域ボランティアのサポートにより、学習活動を中心に活動を行うことをとおして、学力やコミュニケーション能力などの育成を図ります。

（9）学力向上推進事業

中学校において、休日に民間教育産業の知識や技術を活用した補充学習会や実用英語検定試験（英検）対策学習会などを実施し、生徒のニーズに合った学習機会を提供します。

（10）学力向上支援教材の活用

「GIGA スクール構想の実現」により児童生徒 1 人につき 1 台を整備したタブレット端末とともに、オンラインで活用できる学習教材を導入し、全ての子どもたちに授業や学校内の活動に限らず、家庭学習でも活用し、自学自習力の向上につなげていきます。

【具体的な取組み内容】

① 「思考力・判断力・表現力」の育成をめざした授業づくり

～授業者の授業改善・学習者の学習改善～

- ・ 現行の学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの実現をめざした授業改善が求められています。学級においては、様々な特性をもった子どもが存在しており、多様性を包摂し、可能性を開花させる授業づくりが必要です。
- ・ 発展的な学習を進めたい子ども、学習面や行動面で困難を示す子ども、個別の支援が必要な子ども等が混在している中で、それぞれに適切な学びを提供するためには、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させる必要があります。
- ・ 適切に一斉授業を行うとともに、発達段階や学習場面に応じて、子ども主体の授業への転換をめざします。教師からの説明のみで受動的に学ぶのではなく、自分の意見や考えを言語化（表現）する機会を設けたり、学習状況に応じた学習方法や学習内容を選択（ICT 活用）したりすることで、子ども自身が主体的に学びにむかうことができるような授業改善を推進します。

② ICT を活用した授業づくり

～言語能力・情報活用能力の育成（言語活動・ICT 活用の充実）～

- ・ 目的や意図を理解し、内容や考えが相手に伝わるように言語化（表現）することに課題があります。また、複数の情報を読み取り、内容を整理したり再構築したりすることにも課題があり、そのつまずきが原因で言語化につながらないこともあります。
- ・ 逆向き設計の授業づくり、思考を深める発問の工夫、協働的な学習場面の設定などを意識し、適切な言語活動を充実させた授業づくりをめざします。
- ・ 子ども自身が情報を収集し、その情報を整理・分析する、他者の意見を参照して思考を整理したり、協働的に学習したりする際には、ICT 活用が

効果的です。授業の中で子ども自身が ICT 機器を使い、自ら情報を得ようしたり、友だちの意見を参考にして学びを深めたりする経験を重ねることで、自律した学習にもつながると考えています。

- ICT 活用は、学力向上のための 1 つの手段ですが、日常的に効果的に活用するためには、ICT 機器への慣れや活用スキルの向上も必要です。授業以外も含めて適切に ICT 活用を推進し、情報モラルや情報リテラシーも含めた情報活用能力を育成します。

③ 学習評価の充実

～指導と評価の一体化・子どもの実態把握（児童生徒理解）～

- 授業のねらいに向かって効果的に学習を進めるには、学習過程で学習状況を適切に把握（評価）することが大切です。それにより、子どもは自身の理解度を客観的に把握し、時には学習方法を改善することができます。あわせて、教師は自身の指導計画を調整し、より適切な指導になるよう改善することができます。このような「指導と評価の一体化」を意識した授業づくりを推進します。
- また、授業改善を適切に推進するためには、目の前にいる子どもたちの適切な実態把握が必要です。校種や学校規模、1 学級あたりの人数といった環境面の違いに加えて、子どもの様子や必要な支援の状況等、学校によって実態は様々です。
- 国や府、市の調査結果等は、大きな集団の平均値のため、必ずしも学校ごとの実態と一致する訳ではありません。取組みをより効果的にするためにも、学校ごとに結果分析を進め、その分析に基づいた実態把握と取組みの支援を行っていきます。
- また、教師の日常的な見取りによる実態把握も重要です。調査結果と目の前の子どもたちの姿を照らし合わせることで、より正確な実態をとらえることができ、効果的な取組みにもつなげることができます。

④ 研究体制の充実

～主体的な研究体制の構築・研修の実施（研修観の転換）～

- 各取組みを充実させるため、実態を反映させた研究体制の構築を推進します。子どもの実態に応じた研究テーマや研究内容を検討し、教師のニーズにあった校内研修を実施することで、各取組みの充実につながると考えています。
- また、「授業と研修は相似形」とも言われるように、校内研修においても教師が主体的に参画し、自律した学びが行われる必要があります。単に前年度までの方法や内容を踏襲するだけではなく、研修の在り方や内容を必要に応じて見直し、主体的な研究体制の構築をめざします。

⑤ 家庭学習の充実

～主体的に学ぶ自律した学習者の育成（家庭学習・自学自習の充実）～

- ・ 柏原市では、これまでの各種調査結果からも、授業外での学習時間が短く、自分で学習の計画を立てたり、自らの学びを深めるために ICT 機器を活用することに課題があることが明らかになっていきます。
- ・ また、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」（令和 6 年 12 月 25 日中央教育審議会）においても、「自律的に学ぶ自信がない」「当事者意識（社会参画など）が低い」といった課題が示されています。

【参考】初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）



- ・ そういった背景をふまえ、②以降の取組みを一体的に進めていく中で、子どもが自ら学習の計画を立てたり、学び方を工夫したり、また、授業での学びをきっかけに自身の興味に基づいて主体的に学びを深められるような自律した学習者の育成をめざします。

⑥ 学力向上の指標と目標値（全国学力・学習状況調査より）

○ 教科調査（平均正答率）

※ 全国値を「1」とした時の数値

	教科	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度
小学校 (6 年)	国語	0.99	0.98	0.97	
	算数	1.00	0.96	1.01	
中学校 (3 年)	国語	1.01	0.96	1.03	
	数学	1.01	0.92	0.95	

○ 質問調査

(1) 平日（授業以外）に勉強している時間（学習塾、家庭教師等も含む）

※ 「1 時間以上」と回答した子どもの割合

	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度
小学校	50.0%	45.0%	43.5%	
中学校	63.9%	63.9%	54.9%	

(2) 休日に勉強している時間（学習塾、家庭教師等も含む）

※ 「1 時間以上」と回答した子どもの割合

	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度
小学校	43.8%	36.6%	37.5%	
中学校	57.7%	46.8%	45.6%	

（3）授業での ICT 機器の活用頻度（前年度まで）

※ 「週 3 回以上」と回答した子どもの割合

※ 教科の平均正答率との相関関係は指摘されていない項目

	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度
小学校	44.8%	39.7%	29.3%	
中学校	25.9%	23.0%	28.8%	

（4）自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたかどうか（前年度まで）

※ 肯定的に回答した子どもの割合

	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度
小学校	64.2%	58.6%	64.2%	
中学校	66.3%	64.1%	72.8%	

（5）課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたかどうか（前年度まで）

※ 肯定的に回答した子どもの割合

	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度
小学校	70.0%	74.6%	77.1%	
中学校	79.3%	74.4%	84.5%	